



講座精神疾患の臨床 7
地域精神医療 リエゾン精神
医療 精神科救急医療

神庭重信 編集主幹,
齋藤正彦 担当編集,
松下正明 監修,
中山書店
2022年6月 544頁
本体価格 17,000円+税

本書は「講座 精神疾患の臨床」のシリーズの1つであるが、その冒頭に今回のシリーズの刊行の意義が記されている。中山書店は精神医学の知を結集したものとして「現代精神医学大系」(1975~1990年刊, 全25巻56冊)、「臨床精神医学講座」(1997~2001年刊行, 全36巻)を発行している。今回の「講座 精神疾患の臨床」は再び約20年という年月を隔てて2020年から刊行されており、今の時代の成果を記録するアーカイブとしての位置づけがある。

ここで取り上げる『地域精神医療 リエゾン精神医療 精神科救急医療』は本シリーズの第7巻として、社会や当事者にとって精神科医療と直にかかわる重要な接点となる、地域・リエゾン・精神科救急という3つの側面を論じている。これらはわが国の精神科医療における社会的課題につながっている。また精神科医療の実践における重要な領域である自殺対策、移植医療を含むコンサルテーションリエゾン精神科医療、周産期メンタルヘルス、精神科救急について、各分野の学会によるエビデンスを集約したガイドラインや診療報酬改定に反映されている状況がまとめられている。

本書は精神医学の専門家に加え、関連領域の第一線の研究者により執筆されており、一般の医療分野・社会分野におけるこころのケアの問題が網羅的に論じられている。そのため各分野における必要な知識(含:用語解説, 参考文献)が提示されており、個々の読者の関心に応えるテキストとなっている。評者には特に今日の課題と将来に向けての提案が印象に残ったが、それらの一部を抜粋して紹介したい。

現状として我が国の地域精神医療および地域ケアの基盤整備はまだまだ発展途上にあるが(p.2)、日本は今後、人口減少・超高齢化社会という未曾有の事態を迎え、支援される人口の減少だけでなく、支援する人口も減少す

る(p.116)。しかも、いずれ地域は修復不可能なほどに崩壊する可能性さえある(p.39)。

その中で地域の精神医療をどう支えるかは喫緊の課題である。

少子高齢化と人口減少による地方の過疎化への解決策の一つとして外科や画像診断の分野ではICT(information and communication technology: 情報通信技術)の活用が行われているが、地域精神医療の現場への応用には診療情報の守秘性という課題への対応が求められる(p.23)。一方でCOVID-19パンデミックの中で精神科デイケアの領域ではICTを用いての教育プログラムや多機関間での交流プログラムなど新たな実践の萌芽も見られている(p.55)。

心のケアにおける地域での生活支援は焦眉の課題であるが、「精神障害者にも対応した地域包括ケアシステム(にも包括)」による重層的支援体制(p.128)や地域での暮らしを支援するコミュニティメンタルヘルsteam(CMHT)という多職種での支援がまとめられている(p.13)。

そして精神障害者の社会参加・就労支援におけるストレンギス・モデル、超職種チーム・モデル、place then trainモデルについて論じられている。ここで、超職種チームによる働きとは、利用者から提起される問題・ニーズに対して各職種から出された知恵を利用者にフィードバックして自己決定を促すものである。これらチームによる働きについては支援者相互の距離がある地方ではICTの活用によって有機的なものになるかも知れない。

本シリーズは前シリーズから20年の時を隔てて刊行された。ここで医療からは離れるが、20年ごとに伝承されるものとして伊勢神宮の式年遷宮が思い起こされる。過去の建築様式である神明造の保存を目的の1つとしており、建替え技術の伝承を行うためには20年間隔が適当とされている。「講座 精神疾患の臨床」のシリーズである本書の位置づけも、新たな知見の紹介とともに精神医学の経験知の伝承が考えられる。2030年問題など地域社会の状況には困難さを感じる時代ではあるが、次の20年に向けてどのように牽をつなげていけるのか、われわれに課せられた役割は小さくはないと感じている。

(谷井久志)